

社会成層論

—バースンズの社会体系論研究—

山田敬道

一、社会体系の概念

二、地位と役割の構造

三、社会成層の基礎理論

—

社会には一定の行動様式が存する。成員の行動は、これあることによつて秩序を保持することができる。成員の行動が一定様式の枠内で反覆するかぎり、社会の統一性は存在するといえよう。このように社会は、様式においてステイックの側面を、行動においてダイナミックの側面を示すのであつて、社会の現実はいかゝる両側面の動的統一である。前者からみれば社会は構造であり、後者よりすれば社会は行動、一般にいって機能であるといえる。しかもこれ

ら両側面の統一が、社会の現実とすれば、構造は持続的機能にすぎず、機能は変化する構造の連鎖にすぎぬ⁽¹⁾といつてよいであろう。ところで社会についての体系でなく、社会の体系化を企図する社会体系論は、このような社会の両側面を機能的に統一せんとして、社会の一般的な概念圖式を樹立しようとする。こうした立場に立つてパースンズは社会体系はいかにして構成されるかを論じ、社会の構造―機能の分析を試みるのであるが⁽²⁾、このことは社会の両側面すなわち組織と過程、様式と活動乃至は構造と機能のごときが共存することを認め、これらの動的統一化を企図することを示すものであろう。ところで社会体系を構造―機能の分析によつて、一般的圖式化が可能であるとはどのようなことであらうか。それは端的にいつて社会体系が、行動を座標軸としているからにはかならない。社会体系は、本質的には行動の体系にほかならないからである。勿論こゝにいう行動は、單位行動というごとき抽象的孤立的なそれではなく、行動者と情況との關係的行動として考えねばならぬ。このように、行動が行動者―情況における關係的行動であるがゆえに、根源的には行動を座標軸とする社会の体系が、構造―機能的でありうるのである。それゆゑ社会の構造―機能の分析は、まずこれを行動者―情況にまで要素化されることが必要である⁽³⁾とされる。

抑々行動が單に刺激―反應方式において考えられるならば、いかなる意味においても、それは社会的次元に登場することはできぬ。それは精々有機体として、有機体―環境の体系にとどまらざるを得ぬ。人間行動の根源的動因としての欲求と、具体的行動としての文化的反應とは嚴に区別さるべきである。有機体―環境の体系は生物学的次元であり、行動者―情況の体系は社会的次元である。両者は範疇をことにする。このように行動者と情況との機能的關係を通してのみ、社会体系は自己の動態を明瞭にすることができるとすれば、行動の分析は確に重要意義を有する。マツクス・ウェーバーの行動分析は、この意味において劃期的重要性をもつものとせねばならない⁽⁴⁾。けれども行動分析は、情況分析にそれと同じ重要性を與えざるかぎり、いまだ社会体系の分析としては不充分といわざるを得ない。こ

のように行動は情況に關係ずけることによつてのみ社会体系の座標軸となりうるのであるが⁽⁵⁾、かゝる主張は原則として承認されねばならぬ。人間行動は文化行動であり、それゆゑ人間行動は文化要因によつて説明されねばならぬといふことは、敢て文化人類学の指摘をまつまでもなくこれを容認しているからである。現実の社会現象が変化し發展していること、それが時空をことにすることによつて千差万別の特種性を示す事實は、不變數と考えられる人間心理性によつては説明できぬ。心理性や自然環境が不變でも、社会現象が可變的である事實は、人間行動の具体相が社会條件(文化的條件)、こゝに所謂情況を媒介することなくしては、解明できないことを示している。一体有機体—環境は、行動者—情況に自明のごとく類推されながらも、その差異性については左程注意が拂われて居らない。行動者—情況は、有機体—環境にくらべ遙に複雑である。「あらゆる社会体系の單位は行動者としての個人であること、かゝる個人は目標の到達に向つて努力し、乃至は対象や事態にないし情緒的感情的に反應し、あるいは自己の情況やさては自身をさへ認識し理解するところの基礎的統一體である。しかも具体的にはある情況において相互—作用するものとしての複數個人を導入することなくしては説明することのできない行動者である」⁽⁶⁾。情況はいうまでもなく、行動者の対象である。パースナズは情況を社会的文化的物理的の三つにわけ⁽⁷⁾。社会的は他者としての行動者であり、文化的は伝統觀念信仰の象徴としての対象化されたものであるとする。行動はこのように行動者に動機的意思を有する行動者—情況の体系における過程であるといつてよいであらう。

行動は特殊の情況刺激に單純反應を示すのではなく、情況のさまざまな対象變化に應じての、期待の体系を發展させるのである。期待は行動者自身の要求—素因と、彼が企圖する行動の種々なる交互性：情況との連関におけるに附隨する満足乃至喪失の蓋然性との關連において構造化されている⁽⁸⁾。かくしてオリエンテーションが行動者の満足の成就乃至喪失の回避によつて行われるとき、この種満足—喪失がいかに深く有機体的意義を有しようと、それゆゑ動機の具体的組織が有機体の有機的分析のみをもつて可能なりといふことはできない。このことは「驗經」の事實に

よつても裏書できよう。経験は行動者の情況にたいする關係の蓄積にほかならないが、このような蓄積の存在はやがて行動者にたいし有機体的意義以上の影響を與える。期待が行動者—情況体系の未來的發展と過去行爲の記憶とにたいするオリエンテーションの時間的側面であるとすれば、このよう期待は、現実には経験によつて支えられていることを意味する。このようにして自我の期待の部分は自我の可能的行爲にたいする他者の蓋然的反應に存する⁽⁸⁾といつてよい。こうした平面にたつと、情況のさまざまな要素は自我にとつて、彼の期待の体系の組織化に関連するとき象徴、サインとしての特種の意義を有することになる。例えば感情的反應は、行動者にたいする快苦の意味要素乃至は承認不承認の要素を含む。さらに認識的オリエンテーションにおいては、知識と理解の正確性や妥当性の基準に服しなければならぬ。一般的にいつて、規範的オリエンテーションはかくのごとくして生まれ、これが集團の文化の一つの重要な要素を形成していくことになる⁽¹⁰⁾。このように社会体系を考察するばあい、いわば物理—化学体系としての有機体から區別するためには、「有機体の行動の代りに行動者の行動を、環境の代りに行動の情況を語るべきである」⁽¹¹⁾ということとは承認されねばならぬ。

以上のべてきたように行動概念には、(一)行動は目的成就あるいは他の豫期的狀態に志向する(二)行動は情況のうちにおこる(三)行動は規範的に統制される(四)行動には努力あるいは動機が含まれる⁽¹²⁾ことなど諸特徴をあげるのであるがこのような特質を有する行動理論を基底とする社会体系の構造—機能の図式はどのように理解すべきであらうか。定義的にいえば、構造は諸單位の比較的安定した雛型化された一組の關係である⁽¹³⁾。このばあい單位は行動者にほかならぬから、構造は諸行動者の社会關係の雛型化された体系にほかならぬ。機能はこれにたいし、その根源が生物学的であれ社会文化的であれ、ダイナミックにとらえるかぎり、それは欲求充足のための行動の過程である。例えば食欲は生物学的に決定されようが、食糧生産の過程や食習慣の可變性は生物学的に決定されているとはいえない。このよう

に欲求の究極源泉は、行動の社会の体系の構造とオリエンテーションに影響するかぎりにおいて社会的次元にあらわれるにすぎぬ。かく構造は機能によつて、機能は構造によつて具体化される。両者をダイナミックにあるいは機能的に統一するとは、以上の事実を示すにほかならない。社会体系はこのように「構造—機能」そのものとして、動的に考察するよりほかになく、そしてこのようにしてのみ社会体系は理解できるのではあるまいか。ところでわれわれが秩序の問題を考えると、例えばさまざまな成員が活動し乍ら相互に他人の行動と相衝突することなく、あるいは全体としての体系の機能にたいし、相互に貢献しうるように仕かけられているのはなぜかなどの疑問が生ずる⁽¹⁴⁾。さらに動機の妥当性が問題となろう。体系が機能しうるとは、成員たる諸個人の大部分がある適度の有効性をもつて、社会的役割を果たしているにほかならないのであるが、これら諸個人が最少限においてであれ、体系にたいする貢献に動機づけられて居らなければ、勿論体系自体作用し得ないのである。しからばこの種動機の体系へのオリエンテーションが、いかにして可能であるかという疑問が生ずる。

さきの疑問にたいしては、構造における制度化の側面を招来せしめる。制度化は行動を一定の雛型に沿うて組織化することによつて果されるのであつて、組織化が構造の重要側面である。あとの疑問にたいしては、構造のもつ分化が答える。行動者が、そこにおかれる情勢的側面についての役割の組織化であるといつてよい。構造は一方において制度化であるが、かゝる制度化は分化を必然的に含むことによつて、行動者を一定情勢のもとに排列している。このように構造はいわば、社会体系における不変数としての役割を果たすのであるが、その重要側面として、とくに制度化と分化の二部門が指摘される。そしてこのばあいとくに注目すべきは、構造におけるこれら二側面は、行動者に限定的意味を與えるということである。というのは制度化において調整される行動者は、同時に分化において一定の役割担当者として配当されているからである。ところで構造をこのような二側面に分解したのは、抽象分析上のことが

らであつて、具体的二分法でなることはくらまでもなり。構造は一つの全的統一としての不可分の結合体であるからである。

- ① G.A.Lundberg, Foundations of Sociology, 1952 p. 329
- ② Talcott Parsons, Essays in Sociological Theory, 1949 p. 31—40
- " Social System, 1951 p. 19—20
- ③ Essays p. 32
- ④ Max Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, 1922 S. 1—30
- ⑤ S. S. p. 4
- ⑥ Essays p. 32
- ⑦ S. S. p. 4
- ⑧ " p. 5
- ⑨ " p. 5
- ⑩ Essays p. 32—33
- ⑪ S. S. p. 543
- ⑫ 武田良三 「理論社会学」(現代アメリカ社会学所収) 昭和29年 95—96頁
- ⑬ Essays p. 34
- ⑭ Essays p. 6—7

それゆゑ構造を全体そのものとして、圖式化することを試みるべきであらう。さきにものべたごとく構造は、諸行動者の社会関係の雛型化された体系にほかならぬから、雛型：思想・行動のユニフォーミティー：そのものの分析から考察を進むべきであらう。このばあい雛型は三つにわけられる⁽¹⁵⁾。まずすべての個人が人間としての情況そのもののゆゑに参加するとき雛型、例えば人間は出生によつて一方の性にぞくし、またある血縁関係を有するようになるべきである。この種の雛は型 ascribed patterns と稱すべきであらう。つぎにある目標そのものについての雛型化である。例えば医学技術はある制度的役割すなわち医者という枠内において、追求されるべきその一例とならう。一般的にいって地位の機能的役割要素について、組織されたものであるから、これは社会そのものにとつても、構成者個人にとつても必要な事が爲されることが保証されるのである。前者のアスクライブにたいし、これは achieved patterns と稱すべきであらう。最後に統合的雛型がある。これまでの二つは要するに、さまざまな諸個人の相ことなる地位・役割に關してのそれであつたが、これはそのような地位や役割の間における可能的斗争と障害とを、より少なからしめる作用をなすのである。社会のすべての地位が一連の組合された齒車のように調和することを保証するものであるから、もし統合的雛型がなければ諸個人は相互的障害と斗争のため、自分の役割を上記の二つの雛型によつて、限定されたものとして遂行することは不可能になるであらう⁽¹⁶⁾。勿論これら三つの雛型もまた密接に結合して一個の粘着体をなしていることはいうまでもない。その意味では、雛型そのものからのアプローチもまた抽象的分析ではあるが、このような三分法は構理解のため不可欠の要件をなす。第一のばあいにおいて、人間が自己の生物学的性質や血統のごときによつて排列され、第二において、相互依存のシステムが可能になるとき分化した「機能的

役割」の内容を確定し、第三にいたつて、社会が全体としての体系を可能ならしめる調整的機能の要件をみたすことになる。

かくのごとくこれら雛型は、それぞれ固有の意義と作用をもつのであつて、まさに相互に協働し乍ら社会の構造面を構成しているのであるから、これら相互の間に軽重の差は存しないというべきであらう。ではあるが社会という体系の内部において、各人がおのおのの役割を割当られることによつて、一定の均衡状態を形成するとともに、外なる環境情況にたいしては一定の限界保持の体制をとるものである以上、所謂統合現象がとくに注目されねばならぬ⁽¹⁷⁾のであつて、統合的雛型において、もつとも重要な構造の支配的側面を見出さざるを得ない。かくして今や単位としての行動者は、社会を構造―機能においてとらえるかぎり、一定の役割として考えられねばならぬ。社会における構成員とは、このような役割におかれた行動者、すなわち役割担当者として考えられねばならぬ。しからば役割とはなんであらうか。つぎに役割の概念について觸れねばならぬ。さきに構造とは行動者の社会関係の雛型化された体系であることをのべたが、行動者が実際に社会関係に参加 participation するのは、全的統一体としての自己をそのうちに投入するのではない。もし全体としての自己を円に比すれば、参加する自己は、円におけるさまざまに分化した部分としての一扇面 sector にすぎない。単位としての行動者は、実は行動者の一扇面にすぎぬ。このような扇面こそが役割とよばるべきであらう⁽¹⁸⁾。それゆえ、さきに社会構造とは行動者の雛型化された社会関係であると、いうばあい行動者は相互関係的に役割を演ずるものとして、個人を意味したのである。このように役割は、行動者をして社会構造にむすびつける連結機であらう。役割の概念は連結機概念である。そもそも社会の観点からすれば、役割は構成員諸個人の行動の普遍的雛型化の要素であるが、かゝる要素性こそが連結機の本質である。勿論こゝにいう要素とはいわば全のなかの一部分という意味における統計概念ではない。そこには明白な目標と標準が厳として存する。そ

れゆえ行動者からみれば自分の役割は、社会的伝統に定式化された集團成員の規範的期待によつて限定されるのであつた。自己の仲間のうちに、このような期待が存在することは、やがて、ある行動者がそこにおかれるところの情況の本質特性を構成するといつてよいであらう。

このようにして行動者が期待に適合するか否かは、便宜の問題でない。特に重大な結果例えば承認と報酬の、非難と處罰のとき、結果が到來する。といつてもこのような外的制裁、影響によつてのみ行動するのではない。却つてそれら諸結果が、彼のパーソナリティーの中核にまで内面化しているといつた方が正しい。行動者は社会化の過程において、程度の多少はあつても、自己集團の標準、觀念のときを吸収しているのだから、外的制裁や影響とは無關係に、それらが動機的力として作用しているというべきであらう。してみれば社会構造の本質側面は、役割におかれた人間自身のそれら期待にたいする適合の積極的動機と、他者による制裁の二つによつて強制されて、ある役割を演ずる人間の独自の行動を限定する雛型化された期待の体系であるといえる。かくのごとき雛型化された期待の体系は、それが正当と考えられるまで行動そのもののうちに確立しているばあい、これを制度とよんでよい。さらに機能的觀點に目を轉じよう。まず制度化された役割は、メカニズムの作用をなすことを指摘したい。人間性のもつさまざまな可能性が、一つの方向に統合されることによつて、社会並に構成員が直面するであろう情況的危機に抗しうる底の一つの統合体にまで結晶化しうるのは、このようなメカニズムを通してのみ可能なのである。パースنزは制度化された役割が、かくのごとき可能性に関して二つの働きをなすことを指摘する。例えば選拔的動機が一つ。その二は無私的動機と私利的動機とを行為の同一方向のために動員されることがある。勿論こうした條件は、制度の面に即してのべたままであつて、雛型化された役割は同時に、個人としての行動者並にそれらが構成する社会体系の機能的欲求とも結びつかねばならぬことはいうまでもなからう。ところで役割概念がこれまでのべてきたものであるとすれば、役割は社会における要であることは今や明白である。例

えばこゝに一つの家族構造があれば、各成員はそれぞれ遂行すべき一群の仕事をもつ。いゝかえれば、各成員は他の成員にたいし一組の權利をもつゝもに、他成員の要求に服しなければならぬことを意味する。それゆゑ、各成員はある程度自己の部署を承知している。父の地位・母の地位というとき、明かにこうした状態におかれた家族の成員を意味したのであつた。一般に市長の地位・社長の地位というばあいも、事情は全く同じである。

このようにみえてくると、役割を考えるばあいは地位について考えねばならぬ。むしろ役割を考える前に、地位について考えねばならぬといつた方が適切であらう。父の地位が父としての役割をなさしめる。かくして父の地位にある成員が、父の役割例えば自己以外の家族成員に經濟保障を與うべき行動に出るのである。經濟保障を與えることは役割であり、役割の前に地位がある。このように役割概念は、それと不可分關係にある地位概念を伴う。役割はもともと機能概念であつて、何かをなすところにある本質がある。これにたいし地位は個人が社会において、權利義務と期待された遂行の複合として、彼が誰であり何者であるかゞ雛型的に規定されたとき生ずる。彼がいかなる活動を遂行するかが、彼が社会において占める部署によつて規定されるとき、彼は特別の部署の把持者であつて、これが個人のその社会において占める地位にほかならない。このような地位によつて限定された行爲的複写が役割である。役割は地位の動的側面をなすのであり、まさに機能的概念である⁽²⁰⁾。かくして妻は彼女の地位の義務として、家政育兒の行爲にたいし責任をとるよう期待される。このように地位を占める個人にたいし、社会は特定の價值・態度・行動を課するのであるが、そこに特定の役割を必然的に隨伴する。役割は地位の動的側面として、この種價值・態度・行動を具体化していくのであり、逆にこのような具体化が地位の占有を強化し保証することになる。一体社会という体系が、その構成員が交代しても、体系自体は存続可能である。このことは体系内にある特定者が、ある期間占める地位を設定しているからにほかならぬ⁽²¹⁾。

パースンズは地位と役割を分析して、相互作用に固有の相互的パースペクティブの下にとらえるべきものとして、地位は他者によつて志向の対象となるばあいであり、役

割は行動者が他者に志向された場合であるとする。かくして社会における個人すなわち行動者は、役割担当者にはかならぬのは、そのとらえ方において軌を一にしている。が、役割担当者は今や地位―役割における個人とされねばならぬ。してみれば行動者は、一社会における「地位と役割」の合成的束である。しかも既に指摘したように、個人の社会参加が扇面としてのみであるとすれば、同一個人が自分の關係しているいくつかの組織体系のそれぞれに随伴する複数の地位を占めねばならないし、事実また占めているのである。具体的個人はこの意味において、複数の「地位と役割」の束であるとせねばならない。リントンの所謂顕在地位と潜在地位の区別は、個人が複数の社会に参加していること、かくして同一個人において複数の地位と役割が占有されること、しかもこれら複数の地位と役割を一個人において矛盾なく、それぞれの社会において遂行されるのは何故かという疑問にたいする説明を試みようとしたにほかならない。

- ⑮ Essays p. 44—45
- ⑯ パースンスはこれら離型をそれぞれ situational, instrumental, integral とよび、それらの性質について詳細な分析を加える S. S. p. 36—51
- ⑰ Essays p. 204
- ⑱ S. S. p. 25—26
- ⑲ Essays p. 34
- ⑳ Essays p. 35
- ㉑ K. Young, Sociology, 1949 p. 465
- ㉒ Ogburn & Nimkoff Sociology, 1946 p. 306—307
- Essays p. 42—45
- S. S. p. 24—25
- ㉔ R. Linton, The Cultural Background of Personality, 1945 p. 99—100頁

邦訳

個人が行動者として、地位―役割にたつことは、個人の社会的分化にほかならぬ。一つの社会において、すべての個人が同一の地位―役割にたつことはあり得ない。もしそのようなばあいがあれば、それはもはや地位―役割でない地位は個人の社会参加の定置化としての限定であり、役割はかくのごとき地位のもつ期待的遂行としての機能にほかならぬからである。ところでこゝで特に注目すべきは、このような分化にはランキングという事実が含まれるということである。というのは社会の考察は、社会価値と社会機能との考察をかならず含むからである⁽²²⁾。勿論こゝにいう社会価値は、社会構造における制度離型としての規範を指す。これあることによつて、一定社会の正当的行爲の様式が形成せられ、その結果として社会の安定性が可能になる。多くの相異なる地位・役割には、一が他にたいし影響を與うべきものと、然らざるものととの区別が存する。例えば警察官によつてかせられる強制は、私的個人に許されぬ（パースنز）ごとき。この種影響の様態が制度的に正当化されたとき、それを権威とよびうるならば、分化のうちには必然的に権威の序列が存する⁽²³⁾といつてよいだろう。一般に社会評價の基準は、それぞれの社会によつてことなる道理であり、それぞれの内部において統合されている。それゆえ例えば、血統を主とする社会と宗教を尊ぶ社会とは、地位と役割を決定していくものがことなり、それらにおいて高い地位と役割を占める者がちがつてくることは十分想像できる。社会価値がそれぞれの社会によつてことなっているからである。機能面からすれば、その社会にとつて重要な社会的機能並にかゝる機能習得の難易のごときが、地位・役割を決定するといえる。もつともそうはいつても例えば、いかなる成人婦人も母の地位と役割にたいし有資格である場合と、極度の専門研究家（例えば理論物理学者のごとき）の場合とを比較するとき、自ら評價がことなってくる。かくのごく地位・役割が割当られるとは、需要

に關しての稀少性が本質的に含まれている⁽²⁴⁾。それゆゑ地位—役割においてとらえられた個人は、社会における分化にほかならぬが、このような分化にはランキングが含まれる。かくのごときランキングの事実は、社会成層 social stratification の現象と密接に關係する。社会成層は社会を構成する人々の等級付けであるからである。社会は個人によつて構成されるというとき、かくのごとき個人はさまざまな上下的地位にたち、それに伴ういろいろな役割を果すものとしての存在にほかならない。このように、社会における上下現象、広い意味における支配現象についてとくに注意を払つた人として、ウエーバー⁽²⁵⁾と松本潤一郎⁽²⁶⁾とをあげることができよう。わち社会には上下的分化の存在が不可欠であること、それが同時に社会の根本性格を規定するものであることを承認せざるを得ない。社会の上下構造は、社会という組織体そのものの中核である。われわれがこゝで問題としようとする社会成層は、このような社会の上下体系の分析にほかならない。さきに社会成層とは、社会における個人の等級付けであるといつたが、それはどのような等級付けであり、それが社会の構造と機能とにたいしどのような關係にたつのであるかを考察しなければならない。再びパースンズにきこう。社会成層は「一定の社会体系を構成する個々人のさまざまなランキングのことであり、ある一定の社会的意義ある觀點にしたがつて、彼等が優位あるいは劣位として取扱われることである」⁽²⁷⁾と。ところでこのばあいランキングの中心基準はなんであろうか。それはまさに道徳的評價ということである。「一定の社会的意義ある觀點にしたがつて」といつたのは道徳的意味における評價ということである。優越とは道徳的優越にほかならず、それは尊敬という特別な態度、性質の対象である。劣位とは道徳的劣位であつて、所謂輕侮、非難極端のばあいには憤怒のごとき態度の対象である。道徳的評價は、社会的ランクを扱うさい、支配的に含まれるのであつて、單に便宜主義から云々するのではない。あだかもそれは物理体系において、物体の關係を指示するための範疇としての、距離の概念に比すべきものであらう。社会を考察するばあい、道徳評價を無視することは許されぬ。それゆゑ「尊敬によるランキング体系は成層の体系である。それは分化的評價の多くの特殊

的基礎の普遍的合成物である」⁽²⁸⁾といえ、上述のことからの端的表現となろう。

尊敬は拡散性の故をもつて、特定個人その他のことからの賞讃せずして、

唯ある有能な遂行のみを賞讃したり、承認したりすることのできぬ報酬体系である。

もし社会優劣が道徳的評價に見出されるとするならば、かくのごときランキングの相違が、社会の体系にとつて何故基本現象であるかを問わねばならぬ。さきに社会構造には制度雛型が含まれることを指摘したが、このような制度雛型は一定社会に固有且つ正当的期待行為の様式を、示すものとしての規範雛型である。それが規範雛型であるというのは、共通の道徳感情によつて支持されねばならぬことを意味する。それに適合することは、方便に非ずして、道徳的責務である。

と、規範として承認され乍らかならずしも万人に実行が期待されて居らぬ。松本博士はこれを社会的自我意識の支持をうくるに至らぬ道徳の種類、例えば慈善博愛の慣行のごときであるとし、道徳と區別して道義と称した。前出文化一〇九頁。それゆえ規範雛型はすべて道徳感情の対象となるといえ

ば、確にいくすぎであろう。しかし制度雛型の廣範且つ重要側面は、道徳の対象となることは承認してよい。してみれば個人は行動において、不斷に道徳評價をうける。道徳評價は社会にとつて本質的である。それとともに評價される個人は、單位としての個人であつて、單に彼のもつ資質や行動についてのみでないことである。個人は具体的に統一的な人格そのものであつて、單に一つの地位や役割によつて切断できぬ。道徳評價は全一的評價として、個人をその全一性において判断する。

この点において、單なる地位―役割は成層そのものでないことは明かである。地位―役割という社会分化が道徳体系に編入され、道徳評価によつて整序されたばあい、社会成層の問題となる。このように道徳評價が、社会にとつて本質的なものであるとすれば、それによつて形成される社会成層現象

もまた社会にとつて、不可欠の側面をなしている。いかなる社会体系においても、道徳的評價による順位の現実体系がある。勿論そうはいつでも、そこには統合された一組の基準を包含するのであつて、かゝる基準によつて評價がなされることはいうまでもない。それゆえ優劣関係の有効な現実体系は、道徳的制裁がそれに応じ要求するかぎりに

において、社会成層の体系とよぶべきであり、逆にかくのごとき規範離型は成層の尺度とよぶべきである。しかも成層の尺度は共通の道徳感情によつて、統合されている道徳的權威によつて特色づけられた離型である以上、それは一般に社会体系の制度離型の部分をなすのである。

個人としての行動者は、目標——志向の統一体としての存在である。志向の重要側面はいうまでもなく、目標の道徳的望ましさについての、彼の情操に見出さるべきであるが、同時にそれは別の意義を有することも否定できぬ。それは快樂満足の源泉であつたり、感情的態度の対象であるかも知れぬ。目標の現実はどうした一群の諸條件からできているがゆえに、一般に道徳的に價值づけられる事物は彼が快樂の源泉として、感情的対象として、彼が望むところのものにほかならない。それゆえ、具体的には重大な相刻がそこに現出する道理であつて、こうした矛盾はとりもなほさず偏差であろう。ところで行動における道徳的情操の重要性は、行動が目標に志向されている事実とともに、正常な行動者は自身と自己の行動にたいし道徳的情操を有していることを意味するのであつて、例えば自己尊敬・罪・恥意識のことが存在する。個人が自身で是認する道徳規範にしたがつて生活する自己尊敬は、成層の尺度による位置の到達乃至保持に重大關係をもつ。行動者は種々の目標の到達、快樂的満足や愛情的反應にたいし関心をもつとともに、他者の承認乃至尊敬にたいしても関心をもつのであつて、もしある個人にして、自身の自己関心を追求するのだといわれるならば、当然ある程度情況の制度に適合させることによつてのみ可能である。要するに個人は、成層の尺度に相当程度までオリエンテーションされねばならぬ。彼の動機は自己の仲間との比較によつて、区別あるいは承認の到達に集中されていることは殆んど疑を容れる余地がない。このように社会体系における行動は、成層尺度にオリエンテーションされねばならぬということは、社会に本質的な事実であるが、尺度の内容すなわち個人がそれによつてランクづけられるところの特殊の基準なり標準というものは、あらゆる社会にとつて一様でなく、かなり可變的で

ある。價值体系といふばあい、價值は廣範な変化を示す。嚴密にいへば、社会をことにすることによつて、それはこととなるといふべきである。たゞわれわれのこゝで試みようとするのは、個々の社会や集團に即して考察するのでなく普遍的圖式にあるとすれば、成層の領域の特別の特徵に専ら妥当し且つ適用されるとき、價值方位の普遍的分類の確立に焦点をむけなければならぬ。ところで個人が上下的に價值づけられるところの、社会的に重要な諸項目を組立てるなどということが可能であろうか。おそらく不可能でないにしても、極度に困難であろう。これまで幾多の社会学者の関心の一つは、こうした領域にあつたともいへる。社会の等級化の基準として、いろいろの價值設定をした古典的事例に接する⁽³¹⁾。しかもこの種領域の研究は重大であり乍ら、著しく立ちおくれの状態にあることは否定できぬ。その主要原因は價值設定の困難さである。ところでこのばあい社会の体系そのもの圖式化を、真正面から試みようとするパーソンズの所説は注目すべき成果を示している。彼は社会評價について六つの分類圖式をたてる⁽³²⁾。すなわち(一)血族單位における成員(二)個人の資質(性・年令・個人美・力)(三)業蹟(一部は(二)に重なり他は(四)に重なる(四)所有(かならずしも物的にかぎらぬ一切の所有)(五)權威(官吏・親・医者・豫言者)(六)權力。こゝにあげた六つの分類は勿論究極的でもなければ、網羅的ともいへぬ。彼自らいうように、普遍的分類を確立するほど社会学の知識が発達しているなどと主張するものではないが、社会評價の観点からすれば注目すべき試論であることは認められる。ともあれ一社会の成層体系における特定個人の地位はこれら六点のおのおのにおける、彼にたいする地位附與の基礎にある共通評價の合成物とみなされるのである。リントンの所謂 ascribed status と achieved status の區別も、ある点においてパーソンズの基準と相覆う。前者は個人が出生、性、年令のごとき生物学的遺伝的資質であらかじめ豫定された社会地位であるのにたいし、後者は個人の才能と努力によつて獲得した社会地位である⁽³³⁾。もちろんこのような二分法も、實際に即するばあい單純にすぎる。アスクライブドの地位が、生得的條件によつて制約されるにして

も該地位に伴う社会的に限定された役割においては、期待されたアチーブメントとその結果としての所有がなければならぬときはその一例をなす。

- | | | |
|------|---|------------|
| (22) | Essays | p. 46—49 |
| | 武田良三「社会学の構造」 | 300—307頁 |
| (24) | W. u. G. | S. 16—19 |
| | Essays | p. 204—205 |
| (24) | S. S. | p. 115 |
| (25) | W. u. G. | S. 26 |
| (26) | 松本潤一郎「集団社会学原理」昭和12年 | 334—346頁 |
| | 「文化社会学原理」昭和13年 | 227—236頁 |
| (27) | Essays | p. 166 |
| (28) | S. S. | p. 132 |
| (29) | Essays | p. 207 |
| (30) | " | p. 167 |
| (31) | とくに著名なものとして例えば | |
| | W. G. Sumner, Folkways, 1906 | p. 170—172 |
| | F. H. Giddings, Principles of Sociology, 1920 | p. 123—124 |
| (32) | 武田, 構造 | 303—304頁 |
| (33) | Ralph Linton, The Study of Man, 1939 | p. 115 |

※以上は社会体系論における社会成層の位置づけのための試論である。本論はその意味で、社会成層論の序説である。各論における具体的考察は後日に譲りたい。紙数の都合上ここでは問題提出に終っている。